
信じれるまで

冴子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

信じられるまで

【ZPDF】

Z0716D

【作者名】

冴子

【あらすじ】

恋愛の永遠性を否定する、冷めた考えの主人公とメールで知り合つた13歳年上の同じ考えの男が互いに恋愛を信じられないという感情を変え、手探りで本当の恋愛を1から探し出す。

プロローグ・恋愛観（前書き）

この話は実話に基づいていて、かなりリアルな話です。
読んで共感頂けたらなと思います。

プロローグ・恋愛観

恋愛に永遠性なんて無いと思つてたし、それが必然だと思つていた。だからそれが悲しいと思つたことも無く、そんなものだと思つていた。

いつか終わり、いつか失う。

そんな虚しい瞬間の楽しみに、人は時間を無駄にして死んで死なれ、時には騙しあう。

勿論私もその中で、虚しい遊びに加わつて、尽くして死され騙し合つた。

その時を埋める物があつたなら、何でも良かった。

欠缺たパズルのピースは、ぴったりじゃなくても無理矢理はめこめばはまるものだから。17歳、高3の受験生。

今まで付き合つた数は3回。

今から思えばそれなりにいい恋愛だつたんだろうなとは思つけど、全ては恋愛の法則通り、一瞬の出来事だつた。

3回目にして永遠の恋は漫画の中だけの物で、あり得ない話だからこれらの漫画はヒットする。

この哀しい法則を悟つてしまつた私は、年齢よりもだいぶスレいで、ネットで精神年齢鑑定なんかをやると、私の精神年齢は32歳だと言われるぐらい、大人びていたし、周りからもそう言われていた。

そのせいか、過去の3人のうち、2人は年上だつたけど、それでも付き合いが長続きすることは無かつた。

結局、年齢が合つた所で瞬間の遊びには変わりはないし、その瞬間がより楽しいかどうかで、そんな風に物事を考えている私は、今まで4ヶ月を超える付き合いをしたことは無かつた。

毎日連絡を取つて、デートの為にバイトを休む。記念日にはケーキを焼いて、プレゼントもした。

遊び人で、家庭をかえりみない母親のお陰で料理の腕は主婦級になり、彼氏に料理を作つては、喜んで貰つていた。

しかしありがとうと笑う彼氏をどこか客観的に見ている自分に気がついて、自分のしている恋愛^{こい}が無性に虚しく思えたりもした。ああ私は恋愛^{こい}をして遊んでるんだなと虚しくなつたりもした。そして虚しさがピークになつたら別れる。

そんな虚しい遊びを繰り返し、今に至る。

最後の彼氏と別れて1年。

その間好きになつた人はいたけれど、友達と争つたり略奪したりとそんなリスクを背負つてまで付き合う価値を見い出せないから、付き合つことはなかつたけど、そろそろまた、虚しい恋愛^{こい}が恋しくなつた。

多分私があのサイトに書き込んだのは、そういう理由だったんだと思つ。

悪名高き出会い系。

そう誤解する人も多いけど、このインターネットがもの凄い勢いで普及し始めた世の中じゃ、出会い系なんて雑誌の文通友達募集ぐらいの一般的で安全なものになつてはいると思つ。危険も多いけど、そのサイトで付き合つててる友達も結構多い。だから私は、ただ気軽にメールを楽しむ為だけにメール友募集の掲示板によく書き込む。

でも、たまたまあのタイミングで出会つた奇跡みたいな出会い系みたいな乙女チックな出来事を期待しててはいる訳じやない。

ただ、学校や家での仮面を脱いで気軽に話せる相手が欲しかつただけ。

内容の所に

「メール友募集」

と淡白に書き込み、続いて年齢、身長、性別を、こんな所で嘘をついてもしょうがないから素直に書き込んだ。

面倒くさくなればメールを拒否すればいい。

そのサイトはどうやら大手だつたらしく、

1日ケータイを放置しておくと100通を超えるメールが来ていて、ひっきりなしにライトが光り、ケータイが震えていた。

その中の全員とメールなんて面倒くさいことはしない。

ランダムにタイトルだけで何人か選び、あとは消去。その何人かを内容を見て1人に絞る。

「はじめまして。良かつたらメールしませんか?」

淡白な内容で、おそらく私の方が年下なのに敬語を使ってくれているいい感じの距離間。

この人ならもし面倒になつても切りやすいだろう。
そう思つて、100分の1の記念すべき出会いの相手にメールを返した。

「メールありがとうございます。一からよろしく。お名前と年齢教えて下さい。」

そのメールを送つて5分たたずくにケータイが光る。
届いたメールのタイトルは

「メールありがとうございます。」

100分の1の奇跡の出会い。
相手の名前は、昭人。

2：メール

学校に行つて、バイトに行つて、家に帰つて勉強をする。

受験生にもなつてバイトなんか…と友達に言われながらも生活費を稼ぐにはバイトをするしか無かつた。

遊び人の母親に、このことだけは感謝出来ない。

弟もまだ中学生で、バイトをして家計を助けることが出来るのは皮肉にも私しか居なかつた。

しかし辛いとも嫌だとも思わない。

これが私の変わらない日常なのだから嘆いていても仕方ない。
その合間をぬつて、昭人とはメールを続けていた。

相変わらずお互いに敬語で、名前に

「さん」をつけながらの他人行儀な関係だつたけど、それが私には心地よかつた。

昭人は私より一回り以上年上の31歳。
彼女と別れて3ヶ月らしい。

昭人からのメールは常に長文で、読むのが面倒になることもあつたけど、私からのメールが途絶えても次の日には忘れたように昭人からのメールが届くので、なんとかメールは続けていた。

メールを始めて一週間。

いつものようにバイト終わりにメールを見ると、受信ボックスにメールが入つていた。

「バイトお疲れ様。ところで冴子さんは受験生ですよね？バイトなんかしてて大丈夫なんですか？」

このメールに私は返信を戸惑つた。

ただのメル友にどこまで喋つていいものだろつか。

余り親しくも無い相手に他人の家庭の話なんかされても重いだけじ

やないんだろうか。

そこまで考えて、私は考えるのを止めた。

話を振ってきたのは向こうだし、それで引かれるようならメールを止めてしまえばいい。

私と昭人を繋いでいるのは所詮、この淡白なメールでしかないんだから。

私はあまり深くは触れず、母親が遊び人で父親は事業に失敗し、私が生活費を稼いでいることを言った。

メールを送り、服を着替え、帰る準備までに約10分。

その間に早くも昭人からの返信が届いていた。

どうせ当たり障りのない励ましの言葉なんだろうなと思いながらメールを開く。

でも内容は思ったのとはだいぶ違った。

「俺も似たような境遇です。」

意外だと思って詳しくメールを読めば読むほど、昭人と私の境遇は似ていた。

お互いの、誰にも分からなかつた部分の話が、常に私達の間では共通で、私はなんとも言えない不思議な感じだった。

まあ世の中日本には1億3千人。

こんな人もいて当たり前なんだろうなと思い直し、メールを読み進めていくと、最後に1つ、質問が書かれていた。

「冴子さんは恋愛をどう思いますか？」

私は素直に、私の理解されないだろう持論を伝えようと思つて、メールを打つた。

「恋愛には永遠性は無いし、所詮は終わりあるものだと思います。」

打ち終わり、いつもながらの素早い返信を待つていると、すぐにケータイが震えた。

「俺と同じ考え方でビックリです！良かつたら今度会いませんか？」

その返信にて、私は結局話を合わして会いたいだけの雰囲気を感じとり、地雷を踏んだなあと思つた。

それでもシフト表を見て、休みの日を探す。

「夏休み入つてからなら空いてます。」

そう返すとケータイはすぐに震えた。

「了解です。夏休み、迎えに行きます。」

私は、ああ面倒なことになつたと返信後すぐ後悔した。でも空いてる日を教えてしまつたあの時の私は、年も住所も離れたこのメールの相手に何かを感じたんだと思つ。

デートの日取りは1ヶ月後に決まった。

デートの場所は私の地元。
昭人が車で私を迎えに来ることになった。

その頃には昭人が私をさん付けで呼ぶことも無くなり、敬語も自然に口語になっていた。

デートの日が近付くにつれ昭人からのメールは増え、私はそれを軽くあしらいながら、デートの約束をしたことを後悔していた。

私はデート 자체が面倒になり、その日バイトに入つていれば幾ら稼げただろうかとため息をついている。しかし約束をしてしまい、またこれ程まだ見ぬメル友と会うことを楽しみにしている昭人に断るのも気が重くて、ようやく、その日1日なんだから頑張ろうという気持ちが芽生えた。

デート当日。

朝早くからの昭人からのメールを、のんびりと化粧しながら見る。

「着いたよ。」

そのメールを見て、私はのんびりとしていた手を早め、急いで準備をした。

私の家はマンションで、遠く離れた窓から所から昭人の姿を探すけれども木に重なって見えない。

直接確認するしかないかと重い足にミュールを着けて、鞄を持って静かに家を出た。

エレベーターを降り、駐車場へと向かうと、見たことのない白いス

ポーツカーが路駐されている。

その横には背の高い、若い男が背中を向けて立っていた。
その時、私は確信した。

この男が、昭人。

その時、私のケータイが震えた。

「もう着いた？」

ふと見ると、昭人らしき男はケータイを触っている。
私は確信して、メールを返した。

「もう着いてますよ。」

昭人はケータイを触ると、ゆっくり振り返った。

「こんにちは」

昭人は、笑いながら口を開いた。

「こんにちは。」

私もぎこちない笑みを浮かべ、挨拶し返す。

「とりあえず車に乗つて。」

爽やかに笑う昭人に言われるままに、私は昭人の車に乗り込んだ。

4：初デート

私は車に乗り、運転する昭人の顔を観察した。

昭人の見た目は25、6ぐらいで、背は170後半ぐらい。

細身で女受けのよさそうなその顔は私も素直にカッコイイと思った。

「写真と实物じゃ全然違うね」

慣れた手付きで車を運転しながら昭人は言った。

「違いますか？」

「全然違うよ。写真じゃ大人っぽかったけど、実際会つたら全然高校生だなって思つたよ」

誓め言葉のつもりなのか、相手の意図がよく読めないまま、返事を返す。

「がつかりしました？」

「全然。实物の方がかわいいよ。」

その慣れたお世辞で、昭人はだいぶ女慣れをしてるなと思った。

「聞いてもいいですか？」

「いいよ。」

「昭人は今まで何人の人と付き合いましたか？」

その質問の後、昭人の表情が微かに変わった。

「…正直に答えた方がいい？」

「はい。」

昭人は、少し間を開けて静かに答えた。

「2、30人かな。」

一般的なかもしれないが、私はその数に驚いた。

虚しい意味の無い遊びを、そんなに回数こなすことに、何の意味があるんだろう。

「多いですね。」

「まあすぐ別れたりしちゃうからね。」

相変わらず昭人は淡々と答えた。

「何ですか？」

「俺が浮気したり、向こうに浮気されたり、突然振られたり、音信不通になつたり。」

私は、運転を続けながらそう無表情に答える昭人が、とても哀しく見えた。

「虚しくないですか？」

ふと出た、私の本音の質問だった。

「まあ俺は恋愛なんてそんなものだと思つてゐるからね。誰と付き合つても終わりが見えちゃうんだよ。」

「結婚とかは？」

「俺、結婚願望とかないから。だから付き合つての瞬間が乐しかつたらそれでいいんだよ。その瞬間だけ満たされてたらね。」

瞬間だけ。

どこか私の考え方と似ている。

私も瞬間だけ乐しかつたらそれでよかつた。

でも、昭人は私とはどこか違う。「寂しいんですか？」

昭人は、何でこんなに足りない部分を無理矢理にも埋めようとするんだろう。

「どうだろう。寂しいのかもしないけど、いつか終わるつて分かつても、終わらない相手を探してゐるんだと思うよ。」

寂しそうに、はにかんだような笑顔で昭人は答えた。

「いるのかな。」

「分からぬけど。でもそういう点じゃ汎子ちゃんは好きになつちやいけない気がする。」

昭人は静かに言い、私は返事に戸惑つた。「何で？」

「多分、好きになつちゃうから終わりの時が辛そう。好きじゃなくとも付き合えるけど、そういう相手は別れるときが楽だから気軽に付き合える。でも好きになつた相手と別れが見えたら辛いから。」

車のエンジン音が、静かに響く。

この人はどこか私に似ていた。

「辛いかな。」

「多分ね。」

「でも別れないかもしない。」

自分でも意外な一言が口から飛び出した。

「どうかな。今まで別れなかつたことある?」

初めての昭人からの質問だつた。

「無いけど、瞬間が楽しかつたらそれでいいなら、続いたら儲けもの。そういう考え方で付き合つていつたらいいんじやないかな。少なくとも、私は好きになつた人ととも、その瞬間はちゃんと恋愛します。それに対し後悔したことはありませんよ。」

昭人は何も言わなかつた。

ただ静かに時間が流れ、不思議とそれが心地よくて、多分昭人もおんなじように感じてたんだと思う。

「じゃあ、付き合つちゃ わない?」

昭人の口調が、最初の明るい口調に戻つた。

「誰が?」

突然の申し出に、私は驚いた。

「俺と、冴子ちゃん。」

昭人は相変わらず笑顔のままで、恋愛慣れしているのが伝わつてき

た。

私は車の窓から外を見つめた。
まだ朝の陽射しがまぶしい。

「いいよ。」

私は表情を変えずに淡々と返事を返した。

この時の私は、多分この人とは3ヶ月もたないだろうと思つてたし、
すぐに別れると思つてた。

今から思えば、この時はまだ知らないことだけの、恋愛初心者だ
つたんだろうなと思う。

ただ一つ言えるのは、軽い気持ちだつたとしても、昭人との付き合

いをア承して いてよかつたとこつじ。

こうして私達は、出合つて数時間、付き合つてここなつた。

初めてのデートは私の地元観光で、帰り際にキスをした。

相手に合わせて背伸びしようとしたけど、結局は経験豊富な昭人に敵う訳もなく、最後は昭人に委ねた。

朝になって、私に彼氏が出来たことなんか夢だつたんじゃないかと思つたりもしたけれど、朝早くから震えるケータイを開けば昭人からのメールで、ああ付き合つてるんだなと実感した。

でも私の生活に何か変化が訪れるわけでもなく、変わらない表情でメールを読むと、すぐにバイトの制服に気軽に、自転車に乗り、バイトに向かつた。会つてゐる時には相手のことばかり考えていても、結局離れてしまえば私が考えるのはバイトと受験と家計のことだけで、それが昭人と付き合つたからといって変わる訳でもなかつた。

付き合つてもうすぐ1ヶ月が経つ。

昭人と私は相変わらずの遠距離だから、最初のデートからまだ1回しか会つていなかつたけど、昭人の変わることのないマメなメールと、私からも連絡出来るようにと買つてくれたウイルコムのお陰でなんとか続いていた。

しかし、メールの内容はいつもお互いにおざなりで、付き合つた当初だとはとても思えなかつた。

バイトの休憩中に、ふと昭人との出会いのきっかけになつたサイトを覗いてみた。

たまたまの書き込みを、たまたま昭人が見て、メールしてきつた100人の中からたまたま昭人を選んだ。

運命といえば聞こえがいいけど、所詮はこの程度なんだと正直言えばがつかりした。

多分私は、このままなんとなくの相手に今まで通り演技し通して結婚するんだろうな。

そう思つたら、私の手は勝手に、再び掲示板に書き込んでいた。

彼氏が欲しかつた訳じゃない。

ただ、この寂しさを埋める何かが欲しかつた。

初めて、あの時の昭人の気持ちが理解出来た。

書き込みは前と同じく淡白で、昭人に分からないよつ身長、体重を偽造した。

何でもいい、寂しいのは嫌だった。

そのサイトは相変わらずの繁盛ぶりで、最初の時と同じように、メールがひつきりなしに届いた。

虚しいメールのやり取りをしたがる寂しい人は、相変わらず大勢いるようだった。

何通かをちらつと読むと、距離感の読めていない、ヤリたい目的のメールが大半で、私はすぐに気が重くなつた。

とりあえずすぐには返信をせず、何通か来たメールのうちから相手を選ぶことにし、時計を気にしながら化粧をする手を早め、駅に向かつて走つた。

学校に着くと、ケータイには昭仁からのいつものモーニングメールが届いていた。

「おはよう。今日は学校遅刻してない？文化祭の練習頑張ってね。」

定型文のような昭仁のメールに、私は優しい彼女を偽つてメールを返し、友達との会話に没頭した。

そのままおぎなりな昭仁とのメールを続け、6時間目が終わり、学校が終わった。

家に帰ると、夜にバイト仲間とご飯を食べに行くための準備を始めた。待ち合わせギリギリの時間に準備が完了し、待たせてはいけないと急いで出かけようとしたその時、ケータイが震えた。光るランプの色は、昭仁に設定した、青だつた。

「夜、何時でもいいから電話ください。」

何かいつもと様子が違つた。

仕事で何かミスでもあつたんだろうか。

いつも弱音なんか吐かない昭仁だったから、何か緊急の用事なのか
と思い、折り返し、すぐに電話をかけた。

何回もコールしないうちに、すぐに昭仁は電話に出た。

「もしもし。」

「どうしましたか？」

優しい彼女の仮面をかぶり、優しく相手に諭すよつて言い掛けた。

「どうか、しましたね。」

昭仁の声は、聞いたことのないくらいに沈んでいた。

「当ててみて。」

怒るわけでもなく、ただ寂しそつぶやくよつて、昭仁は言った。

「夜、私がバイトの男の子とご飯を食べに行くことですか？」

「違う。」大学決まつたら、海外に行くことですか？」

「違う。」

昭仁の声のトーンがどんどん沈んでいった。

「じゃあ、なんですか？」

私は、知らないふりをしながら、答えを知っていた。

相手から、その答えが言われないよう望みながら、返答を静かに待つた。

「何で、書き込んだの？」

間を開けてよつやく答えた昭仁の声は、今にも泣き出しだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0716d/>

信じれるまで

2011年1月31日07時00分発行